

# ナラティブにおける「わかる」ことの多重構造

—“共通体験”をどう理解するか?—

饒平名 尚 子

## 1. はじめに

Ochs & Capps (2001) は、家族の日常会話におけるナラティブを分析し、親しい者同士のインタラクションにおいて、物語はつねに複数のストーリーラインの存在にさらされ、話し手と聞き手が共同して物語をつくりあげていくことを示した。会話において自然発生する物語では、語り手と聞き手という役割の境界はあいまいになり、参加者の相互作用を通して、実際に起こった出来事は何であったのか確認されるだけでなく、その出来事のもつ意味や影響、解釈が交渉されていくのである。

さらに、Ochs, Smith, & Taylor (1989) では、情報の持ち主や出来事をじかに経験した者のみが主導権をにぎって語りが進むのではなく、出来事が起きたときにその場にいなかった家族のメンバーも、しばしばストーリーラインの構築に貢献し、事の真相をあきらかにしようとするのがわかっている。家族はこのようなして、出来事の持つ社会的意味を互いに確認したり、修正していくのであり、そのためにナラティブの果たす役割は大きいことを指摘している。

同じ文化に属し、同じ家族として暮らす者同士であっても、個人的にアクセス可能な情報の質と量、社会的な知識や思惑が異なれば、同じ出来事でも異なったストーリーラインとして解釈され、その違いは会話の中で明らかになっていく。Ochs等の研究は、基本的には、家族の中の一人が経験したことを他のメンバーがどう解釈し評価を与えるかを中心に論を進めているが、たとえメンバーが共通経験、共有された出来事と考えられることを語る場合であっても、複数のストーリーラインの存在にさらされる、という点ではなんら変わりはない。更に、こういった相互行為による、いわゆる sense-making activity は、アメリカの主流派の人々のナラティブだけの特徴では勿論ない。本研究では、共有されていたはずの出来事の解釈をめぐる違いが、いかに語られていくかを、日本人

夫婦の自然談話におけるナラティブをとりあげて分析する。会話の中で、一人の会話参加者(妻)が、頻繁に「わからない」「わからなかった」と発言する。出来事を語る上で、その出来事が「わかる」ために、具体的には、①何が起きたのか、登場人物一人ひとり、それぞれどのような行動を、各出来事の発生時点ですったのか、②なぜ登場人物達はそのような行動をとったのか、③なぜその出来事は語る価値があるのかという3つの大きな要素にわけて考えることができる。どのような情報のもと、どのように因果関係を組み立て、あるいは情報の欠如を相手に伝え、ナラティブを構成していくかを、本研究では分析する。Labov & Waletzky (1967)、Labov (1972) で指摘された物語の構成要素 (component) の complicating action、resolution 及び evaluation にも関わって、物語の理解は話し手・聞き手と交渉され、吟味されていく。さらに、ある出来事が別の出来事の前提となっていたり、小さなエピソードが大きな物語に埋め込まれていたりすれば、それぞれのエピソードにおいて、上記の点について疑問が生じる。物語は複数の段階で「わかるかどうか」(または納得がいくかどうか) 疑問にさらされ、チャレンジを受け、共通理解に達しない可能性がある。

また、会話参加者が「わからない」ことを言語化した場合の反応も複雑である。さらなる解釈上の齟齬へつながる可能性があることを、本研究では示していく。

物語がわかる、ということは、単に起きた出来事を時間軸に沿って正確に把握するだけでなく、登場人物の心情、行動の背景、その行動が与えた影響との因果関係を理解することである。これら一つ一つについて会話参加者は段階を踏みつつ、納得がいくかどうか吟味する必要がある。このようなプロセスは、会話参加者相互による複数の解釈や補足情報の提示を通じ、会話参加者の identity の変化をもたらさう。

## 2. 先行研究

会話における聞き手の重要性、特に、co-narrator, co-author として会話の方向性に深く関わる聞き手の存在については、これまでも指摘されてきた (例えば Polanyi 1979; Duranti 1986; Georgopoulou 2007 など)。話は会話の起きたコンテキストの中で話し手と聞き手双方の影響を受け、互いに相手の言葉に反応し

たり質問したりする中で、語る価値や意味解釈がなされ、進んでいくのである。このような見地にたって、家庭における自然談話で発生したナラティブを分析した研究の例として Ochs とその仲間の研究者たちがいる。

Ochs, Smith & Taylor (1989) は、家族の食事時の会話を録音し、そこで語られる物語の一部は、問題解決に向けた探偵物語としてとらえられる、と述べた。会話参加者は、欠落している（と思われる）情報を埋め合わせるために、登場人物の行動や出来事の詳細について、何度も質問をし、真実を突き止めようとするという (Ochs et. al., 1989: 98)。

Certain tellings involve extensive participation of other family members in a groping process to make sense of the problem underlying the narrative's initiating event. We call such narratives “detective stories” in the sense that there is missing information that is felt by some co-narrator(s) to be vital to understanding the problem that motivates actions and reactions of protagonists and others in the storytelling situation. Co-narrators return, sometimes again and again, like Lieutenant Columbo, to pieces of the narrative problem in an effort to find “truth” through cross-examination of the details, sometimes struggling for an illuminating shift in perspective.

つまり、会話参加者は真実をつきつめるために、刑事コロンボのように、何度も質問をし、欠落している情報を求め、頻繁に co-narrator として語りに関わってくる。このような語りを Ochs et. al (1989) は “detective stories” と呼んだ。特徴としては、語っている人だけが真実を知っている唯一の人という見方ではなく、その場にいる家族全員が、たとえその出来事について知識を持たなくても、会話に参加して、問題を明確化しようと関わってあげられる。

さらに、Ochs et. al (1989) によれば、物語を構成する要素 (component) の組み立て方にも特徴があるという。同じ出来事に対して、複数の説・ストーリーラインの可能性 (version) が登場する。最初に語られた話に対して、他の家族が関連ある情報をさらに提供したり、問題を分析したりして、新しい解釈を提示するのである。結果として、最初に語られた話は、唯一絶対的に正しい話ではなく、複数の可能性の一つに過ぎなくなる。The storyではなく、a story

なのである。

The information that surfaces may lead to a reanalysis of the earlier story's central problem. Such information thus recontextualizes the earlier story as not *the* story but *a* story, that is, only one version of the narrated events. (Ochs, Smith & Taylor, 1989: 98)

また、Ochs & Capps (2001: 170) が指摘しているように、複数の出来事をどのように関係を持つものとして語るかという作業は、会話参加者の共同作業を通して成し遂げられていく“sense-making activity”といえる。

... organizing events into a narrative episode is a sense-making activity. With fellow interlocutors, we knit actions, thoughts, and feelings into an episode, and weave episodes together into the narrative of our lives.

したがって、複数の出来事が複合的に組み合わさっている場合には、それぞれの出来事の取り扱いにおいて、会話参加者は何がなぜ起きて、それが他の人や出来事にどう影響を及ぼしたのか相互交渉しながら吟味することとなる。

このようなOchs等のフレームワークを援用しながら、本研究では、日本人夫婦の会話における、共通体験に基づくナラティブを分析し、いかに会話参加者(夫と妻)それぞれが異なる視点から同じ出来事を見ているか、またそれゆえに解釈上の困難や意見の食い違いに陥り、それを相互交渉しながら納得するようになるか、示していく。さらに、「何が起きたか」のみならず、「なぜ起きたか」、その出来事が持つ意味・価値に関する疑問、それぞれについて会話参加者が理解できることが、ナラティブにおいて「わかる」ということであることを、実際に「わからなかった」発言が頻出する例を用いて示していきたい。

### 3. データ

米国ワシントンDCにおいて録音された、日本人夫婦の食事会の会話を使用する。録音時間は約80分間であった。夫がアメリカの大学院に会社からの派遣

で留学したため、録音当時、夫婦でアメリカ在住である。夫は33歳、妻は25歳であった。結婚してすぐにアメリカに来ることになり、結婚してからちょうど1年たったところである。アメリカ滞在歴も1年である。子どもはいない。なお、本データはOkazaki (1994) で使用した会話（日本人夫婦6組の音声録音）の一部を利用している。参加者名は全て偽名である。

本研究の調査者（饒平名）は、この夫婦に録音機材を手渡し、食事時などの自然談話の録音を依頼した。したがって、調査者自身は会話に参加していない。また、会話が録音されたのち、会話をトランスクリプトに起こし、意味がよくわからない部分、省略が多い部分について、会話参加者に対してプレイバック・インタビューを行った。

Okazaki (1994) では、日本人の親しい者同士の会話の特徴を、「省略」(ellipsis)に焦点をあてて明らかにした。そこでは、同じ日本人の中にも異なる「会話のスタイル」(Tannen 1984) がみられ、共有されている（はずの）情報の省略の仕方、省略の量にも異なるスタイルの傾向が見られることを指摘した。省略された情報を、どれだけ聞き手が察して解釈することができるか、会話参加者間で、情報復元への期待度も異なった。このような要因が原因で、誤解や相手への不満も生じることを示した。

本研究では、自然談話におけるナラティブに焦点をあて、夫婦の会話において発せられた「わかんない」「わかったあ？」という理解に関する一連の発言を取り上げる。ある出来事に関して、妻は何度も「くま君（夫の愛称）わかった?」「あたしわかんなかった」を繰り返す。その出来事が起きた時、夫も妻もその場に居合わせ、「面白かったねえ」とお互いにその出来事を評価し、笑いあっているにもかかわらず、その評価自体が、「実は何が面白いのかわからなかった」という妻の告白へと会話の中で移っていく。

まず、妻の「わかんない」という発話をたどりながら、物語を理解する上で、どのような情報を会話参加者が必要としているのか分類をしていきたい。そして、「わかる」「わかんない」が会話参加者のidentityとどうかわるか考察をしていく。

#### 4. 「わからなかった」をめぐる発話

本研究の対象とした会話において、妻は、同じ出来事をめぐって「わかんなかった」「わかんない」といった発言を頻繁にしている。例えば、以下のような発話である。直前までの会話のトピックを、「そういえばさあ」と言って変更し、妻の疑問の中心である「足袋に関する話題」を導入する。

実はこの会話が録音される前、日本に帰国することになった友人（山村夫妻）が訪れ、一緒に食事をした。手土産に山村夫妻は、ラルフ・ローレンの靴の箱を差し出した。ところが中には地下足袋が入っていたのだった。しかし、それには、その前に起きた別の事件が関わっている。つまり、山村は、以前、会社でアメリカ人からラルフ・ローレンの靴の箱をもらった。開けてみると、日本の地下足袋が入っており、大笑いになったという出来事である。そののち、山村はこの箱を、本研究でとりあげる夫婦の家に食事に招かれた時持参し、プレゼントとして渡した。その時のことを、夫婦で話している。なお、注目すべき発話については、スクリプトでは、四角で囲んで示した。その他の記号については、以下のとおりである。

スクリプトで使用した記号

□で囲まれた発話：注目すべき発言

—：長く伸ばされた音

？：上昇イントネーション

└：オーバーラップ

[ ]：間の長さ

・・・：気づきうる短い間

##### 【例1】

- 1 弘子：そういえば、あたしさ、あれ、
- 2 足袋のやつがよくわからなかった
- 3 正志：え？
- 4 弘子：あの足袋ってさあ
- 5 正志：うん
- 6 弘子： 何、わざとふざけて足袋をいれたの？ なんか



上記の会話の後、妻は今度は、山村がアメリカ人から足袋をもらったときに笑ったのかどうか、夫に尋ねる。しかし、夫はそれについては、山村に「聞いていないからわからない」と答える。そのすぐあとで、妻は再び、「わかんなかった」と述べる。

〔例2〕

- 1 弘子：じゃ、山村さんは、笑わなかったんだ
- 2 正志：うん、じゃないかな、わかんない、その
- 3        その辺はよく、詳しくは聞いてないからわかんない
- 4        でも山村さんはもらったんだからさ、笑えないよね、
- 5        アメリカ人の人は大まじめでくれてるわけだしね
- 6 [間2秒]
- 7 弘子：でも、何、何
- 8        アメリカ人はあんなことしたらさあ、アメリカの人もさあ、
- 9        なんだろうって思うんじゃない？
- 10 正志：うーん
- 11 弘子：どうしたんだろう、この人って
- 12        あたし、何が起きたのかわかんなかった
- 13 [台所で食器を洗う音]

ここでの妻の発言（「アメリカの人もさあ、なんだろうって思うんじゃない？ どうしたんだろう、この人って」）をみると、アメリカ人の行った行為（ラルフ・ローレンの靴の箱に地下足袋をいれること）は、日本人だけでなく、他のアメリカ人にとっても不思議な行為ではないのか」という疑問を持っていることがわかる。つまり、この段階で妻は、なぜアメリカ人は足袋をラルフ・ローレンの靴の箱に入れたのか、夫の説明を聞いても、十分に納得していない。そのことは、6行目の2秒間の間や、7行目の「でも、言い淀み（「何、何」）にも映し出されていると言えよう。

「何が起きたのかわかんなかった」という妻の発言に対して、特に夫の反応はなく、妻は台所で洗い物をする。洗い物の音が続き、いったんはこの話題は終わったかに見えたが、しかし再び、夫婦は、山村夫妻がラルフ・ローレンの



箱を差し出した時に真面目な顔でいたずらをしかけたことに言及する。いかにその出来事がこの夫婦にとって印象に残る事柄であったかを示すかのように、話題は何度も山村夫妻の「足袋事件」に戻る。

トピックは次に、山村夫妻がいたずらをこの夫婦に仕掛けた時の様子に移る。以下は夫が山村の妻がいたずらを早くしたがっていた様子だったことを述べる場面である。

**例3**

- 1 正志：それわざわざ持ってきて、
- 2           そばに置いたりとかさあ、
- 3           してさあ
- 4           「あなた早くお渡ししないといけないんじゃないの」とか言ってたからさ
- 5 弘子：ほんと？
- 6 正志：やっぱり、山村さんの奥さんの方が、押さえきれない感じだし
- 7 [間4秒]
- 8 弘子：あたし最初箱あけたときさあ
- 9           何が、
- 10           何がはいってっか、わかん、みてもわかんなかった全然
- 11 [間1秒]
- 12 弘子：なんでラルフ・ローレンの箱にいれたんだろうねえ、その人
- 13 正志：(笑いながら)それがアメリカ人だから箱がなかったんじゃないの？
- 14           靴を入れる、
- 15           あれ靴だからさあ、根本的には
- 16           だから(笑う)
- 17           靴だから、おんなじ靴だからいいだろって
- 18 弘子：(笑う)

妻は再び「何がおこったのかわかんなかった」(10行目)と述べる。今度は、箱をあけたときに何がはいっているのか、見てもわからなかったというのである。そして妻の次の疑問「(アメリカ人は)なんでラルフ・ローレンの箱にいれ

たんだろうねえ」(12行目)という発言に対して、夫は、アメリカ人の目からみれば、足袋も靴の一種であるため、靴の箱にいれたのであろう、という推論をする。

こののち、夫婦は笑いながら、同じいたずらを今度は自分たちが他の人にやるとしたら誰がいいか、相談をする。何人かの候補があがり、そのたびに、その人は怒ってしまう可能性があるかもしれない、と却下したりしながら、足袋の話題が続く。そしてあんなに笑った夫を観たのは初めてである、という趣旨のことを妻が述べ、再び、「わかんない」が登場する。

#### 例4

- 1 弘子：だって、へへへへ〜くらいだよ、くま君
- 2           あんなに甲高い声上げてあんなに
- 3           あたし何おこったのかわかんない
- 4           何をさー三人で笑ってんだかさ
- 5           何でおかしいのかなーって
- 6 正志：腹がよじれるくらいおかしかったよ（笑い）
- 7           ほんとに、ほんとに腹がもうよじれるくらい

このように、会話の中で「わかんない」は頻繁に使われた。理解できなかったことを表す、このような発話の数を表1にまとめた。この表からわかるように、会話の中で、足袋事件に関して、わかる、わからないに関連した発話は妻に多い。理解できなかったことを示す「わかんない、わかんなかった」が4回、自分が理解できていないのに夫は理解していたのか、という文脈での「わかった？」は5回である。また、「なんで～なのか？」(例えば、「なんで(アメリカ人は)ラルフ・ローレンの箱にいれたんだろうねえ?」)の形で因果関係に関する疑問を発するものが3回、「それでどうしたの？」の形が2回である。

表1 「わからない」に関わる発言数

	妻	夫
わかんない、わかんなかった	4	3
わかった?	5	0
なんで～なのか?	3	0
それでどうしたの?	2	0
合 計	14	3

これに対して、夫は「わかんない」と言ったのは3回であった。内訳は、妻から自分の友人（山村）がアメリカ人から足袋をもらった時の状況について聞かれ、それについては山村に詳しく聞いていないので「わかんない」と2回答えている。

【例5】

- 1 弘子：え、山村さん、笑ったら失礼だから
- 2 正志：いや、それ、もらったから
- 3 笑えない……だろうねえ
- 4 弘子：じゃ、山村さんは、笑わなかったんだ
- 5 正志：うん、じゃないかな、わかんない、その
- 6 その辺はよく、詳しくは聞いてないからわかんない
- 7 でも山村さんはもらったんだからさ、笑えないよね、
- 8 アメリカ人の人は大まじめでくれてるわけだしね
- 9 [間2秒]

もう一回は、知人からのいたずらに最初から気づいていたかという質問に対して、最初はいたずらをしかけられていることは「わかんなかった」と答える。

【例6】

- 弘子：あたしたちの、あたしたちだってさあ、顔にでたはずじゃん、  
うれしいなって思って、ラルフ・ローレン  
でもくま君わかった?

[間2秒]

正志：う？ 何が？

最初？

弘子：うん

正志：いや、もう全然わかんないよ、これもう

もらっていいのかなあって思って

ラッキーみたいな

[せんべいを食べる音4秒]

妻が話の“落ち”とでもいうべき点が「わからなかった」と言っているのに対して、夫は話の落ちは十分理解しており、どの時点でいたずらをしかけられたことに気づいたかだけが問題となる。

これらの会話からまとめると、「わかった」と言えるためには、大きく分けて次の3つの要素において、情報を持っている必要があると言えよう。すなわち、①何が起きたのか、②なぜ登場人物はそのような行動をとったのか、③なぜおかしいのか（話の落ちは何か）である。下表に、それぞれの項目に対する夫と妻の理解の違いを示した。

表2 「わかる」をめぐる情報の違い

「わかる」をめぐる情報の種類	夫の理解	妻の理解
なにが起きたのか	<p>①友人（山村夫妻）から、ラルフ・ローレンの靴の箱をもらったが、開けてみたら中身はゴム底付き地下足袋だった。</p> <p>②山村の説明によれば、もともとはアメリカ人からラルフ・ローレンの靴箱に入った足袋を山村がもらったのであった。</p>	ラルフ・ローレンの靴箱に入っていたのは何か「わからなかった」
なぜ登場人物達（①アメリカ人②山村③夫）はそのような行動をとったか	<p>①アメリカ人の行動：山村の会社の創業精神（ゴム底付き地下足袋を売って利益を得た）を忘れるな、という山村への励まし。また、足袋は靴だという認識（いずれにしても大真面目）</p> <p>②山村の行動：足袋をアメリカ人からもらって驚いた。しかし、笑ったかどうかは不明。もらった本人なのでアメリカ人の前では笑わなかっただろうと推測する。</p>	<p>①アメリカ人の行動、②山村の行動ともに「わからなかった」</p> <p>③夫の行動：夫はなぜ足袋だとわかったのか。いついたずらだとわかったのか。なぜ一目見て足袋だと理解したのか、「わからない」。</p>
なぜおかしいのか	<p>①アメリカ人が大真面目にやったことが、日本人の感覚からずれている。</p> <p>②夫自身はラルフ・ローレンの高価な靴をもらい得したと考えたが、中身は地下足袋だったというどんでん返し。</p>	<p>「わからなかった」</p> <p>①アメリカ人はわざとやった？ ふざけているにも関わらず大まじめに演技したから、おかしいのか？</p> <p>②なぜ3人（山村夫妻と夫）が大笑いしているのかわからなかった。</p>

では、順番にこの3つについて、詳細にみていく。

## 5. おきた出来事を確認する

「わかったかどうか」に関する最初の段階は、おきた出来事はなんであったかを確認することである。Labovのフレームワークにおける complicating actions にあたる部分の確認である。Labov & Waletzky (1967) によれば、予想や通常の期待からはずれたことが起きたとき、その出来事は他者に語る価値がでてくる。この夫婦の会話においては、予想と反する出来事の根幹が、すなわち友人からしかけられた「いたずら」である。

ここで、起きた事柄を時間軸順に並べるとおおよそ次のようになる。二つの関連する出来事があり、出来事1が起きたのち、その中の登場人物の一人が、本研究でとりあげる夫婦に対していたずらをする出来事2が起きた。

### 出来事1

- ① ゴム関連会社に勤める山村が、アメリカ人の客人よりラルフ・ローレンの靴の箱をプレゼントとして渡された。
- ② 中をあけてみると、ゴム底のついた地下足袋であり、アメリカ人が九州を旅行した際に購入したものであった。
- ③ アメリカ人は、会社の創業の頃、ゴム底つきの地下足袋を販売したことを知っており、「創業の精神を忘れないように」という意味で日本人に足袋をプレゼントしたのであった。
- ④ その場にいた日本人社員たちは大笑いした。

次に、その後におきた、出来事2は次のようなものである。こちらが、夫婦が直に関わった出来事である。

### 出来事2

- ⑤ アメリカ人からもらった靴の箱を、山村とその妻は、友人夫婦の自宅に招かれた際にプレゼントとして持参した。
- ⑥ 夫婦はブランド物の高価な靴をもらったと思ったが、あけてみると地下足袋が入っていた。
- ⑦ その場にいた者達で大笑いした。

- ⑧ 山村が、地下足袋が箱に入っている理由を説明した（アメリカ人の客人からもらったエピソードである、出来事1の披露）。

ここで妻の疑問は、靴の箱に入っていたものは何であったのか、そして、それが足袋であることやいたずらであることに夫はいつ、なぜわかったのか（箱をあけた瞬間にわかったのか）である。この箱を持参した山村は夫の友人であり、妻弘子は面識はあるものの、山村に関する情報量は夫の方が多い。また、妻は夫より年齢が若く、子どもの時から地下足袋を見たことがほとんどなかったという。それゆえに、箱の中に入っていたものが足袋であることがすぐにはわからなかった。また、もてなしのために妻は台所に時々立ったため、一部始終を聞いていたわけではなかったのである。このような情報の欠如、出来事が起きた時にどの場所に立っていたか、といった違いから、この話のポイントを十分に理解することができなかったのである。

さらに複雑なことに、この二つの出来事は、夫婦の会話の中で語られる時、わからなかったのは、その出来事が起きた時点だったのか、思い出しながら話している今でもわからないのか、区別する必要がある。例えば、次の発話において例7は過去、例8は現在も継続した疑問が語られている。

**例7**

- 1 弘子：あたし最初箱あけたときさあ
- 2 何が、
- 3 何がはいつてっか、わかん、みてもわかんなかった全然

3行目では、弘子は「最初箱あけたとき」と時間を指定し「わかんなかった」と過去形で述べている。思い出語りをしている今は、中身が地下足袋だったことはわかっている。しかし、次の例8では、今もわからない状況なのである。

**例8**

- 1 弘子：そういえば、あたしさ、あれ、
- 2 足袋のやつがよくわからなかった
- 3 正志：え？

- 4 弘子：あの足袋ってさあ  
5 正志：うん  
6 弘子：何、わざとふざけて足袋をいれたの？ なんか

ここで2行目のでてくる、「足袋のやつがよくわからなかった」という弘子の発言は、今も足袋の事件についてよくわかっていないことの告白である。6行目でさらに、「ふざけて足袋をいれたの？」と述べているが、これも現在まだ抱えている疑問である。このように、妻の発言には、今もわからないこと、今はわかっているが、出来事が起きたその瞬間には理解できなかったことの両方が含まれている。そのために、どちらの時点のことを話しているかによっては、「わからなかった」が繰り返し出てくることになった。

では、次のセクションでは、登場人物の行為の「理由・原因」に関する疑問についてみていくこととする。

## 6. 行動の理由・背景

何が起きたのか、の次に問題となるのが、登場人物がとった行動の理由や因果関係に関する解釈である。ここでは、複数の登場人物の行動が問題となる。以下、はじめにアメリカ人の行動、次にアメリカ人から足袋をもらった日本人(山村)の行動、そして最後に夫の行動に関してみていく。それぞれの登場人物の行動に関して、なぜそのような行動をとったのか、妻は疑問を発する。

### 6.1. アメリカ人の行動

地下足袋を山村にプレゼントしたアメリカ人の行動に関して、弘子は次の二つの疑問をいただく。

- ① 山村に、なぜ足袋をプレゼントしたのか  
② なぜ足袋をラルフ・ローレンの靴の箱にいれたのか

それぞれに対して、妻は「わからない」と発言する。客をもてなすために、時折台所に立つことのあった妻は、出来事を断片的にしか目撃していなかった



のである。上のセクションでも取り上げた例8で、妻は「(アメリカ人は) わざとふざけて足袋をいれたの?」と①の疑問に関する質問をしていたが、例9でもアメリカ人の行動に対して疑問②を発している。

**例9**

- 1 弘子：でも、何、何
- 2           アメリカ人はあんなことしたらさあ、アメリカの人もさあ、
- 3           なんだろうって思うんじゃない?
- 4 正志：うーん
- 5 弘子：どうしたんだろう、この人って
- 6           あたし、何がおこったのかわかんなかった

つまり、他のアメリカ人にとっても、足袋をラルフ・ローレンの箱に入れてプレゼントにすることは奇異な行動に映るのではないか、というのである。

このようにして、弘子はこのアメリカ人の行動について、なぜそのようなことをしたのか、わからない、と繰り返す。

## 6.2. 山村の行動

第2に、弘子が問題とするのはその箱を最初にアメリカ人からもらった日本人(山村)の行動である。箱をアメリカ人からもらったときに、山村はアメリカ人を目の前にして笑ったのか、「それで、どうしたの?」「じゃどうしたの?」と繰り返し夫に尋ねる。会話参加者間で持っている情報の違いや話の落ちに関する期待の違いから、夫にとっては話が終わったように思えても、妻は質問をし続けることとなった。

**例10**

- 1 弘子：それで、どうしたの?
- 2 正志：・・・うん
- 3 弘子：じゃどうしたの? それで。笑うわけにいかないじゃん、
- 4 正志：うん
- 5 弘子：どうしたの? それで

- 6 [間2秒]  
7 正志：いや、だから、そんなときは、どうも有難うございますってもらった  
    んだけどー  
8 弘子：うん  
9 正志：会社の人たちが大笑いだったんだって  
10      ほんと、うん  
11 [間5秒]  
12 弘子：え、それ周りーに、人いたんでしょう？  
13 [間1秒]  
14 正志：うん、だから他の人たち笑ってたんだってよ  
15      うん  
16 弘子：え、山村さん、笑ったら失礼だから  
17 正志：いや、それ、もらったから  
18      笑えない……だろうねえ  
19 弘子：じゃ、山村さんは、笑わなかったんだ。  
20 正志：うん、じゃないかな、わかんない、その  
21      その辺はよく、詳しくは聞いてないからわかんない  
22      でも山村さんはもらったんだからさ、笑えないよね、  
23      アメリカ人の人は大真面目でくれてるわけだしね  
24 [間2秒]

この会話では、間が3回起きる（6行目、11行目、24行目）。「それでどうしたの？」という最初の妻の質問に、夫は何についての質問なのか、またなぜ山村が笑ったかが問題なのか、真意がつかめない。アメリカ人からラルフ・ローレンの靴箱をもらい、開けてみたら地下足袋だった、それだけで話は終わっていると考えている。しかし、妻にとって、話の落ちはまだ終わっていない。

妻にとっては、アメリカ人が大まじめにやったことが、日本人からは大笑いする結果であった、ということが落ちなのである。ただラルフ・ローレンの靴の箱に入った地下足袋をもらった、ということだけで話が終わるべきではなかったのである。だから、山村が靴の箱をもらった時、アメリカ人を前にして笑ったかどうか、を妻は問題にする。大まじめに贈り物をしたアメリカ人と、そ

れを笑う日本人、その対立の確認が妻にとっては重要であった。

話がわかる、ということは、このように、何を落ちと考えるかということに深く関わる。登場人物の行動が、自分の考える話の結末にどうかかわっているか、納得がいくまで情報をもらえなければ、妻はこの出来事をわかったと思えなかったのであろう。

### 6.3. 夫の行動

第3に夫に関して妻は疑問を投げかける。夫は箱を開けて大笑いしていたが、なぜ大笑いできたのか。つまり、どの時点でこの出来事をどう理解し、その結果として大笑いしたのか、妻は「わかった？」を繰り返して夫に尋ねている。次の例11は、山村夫妻からいたずらを仕掛けられたことについて、いつわかったのか、聞いている場面である。

#### 例11

- 1 弘子：あたし達の、あたし達だってさあ、顔にでたはずじゃん、
- 2            うれしいなって思って、ラルフ・ローレン
- 3            でもくま君わかった？
- 4 [間2秒]
- 5 正志：う？ 何が？
- 6            最初？
- 7 弘子：うん
- 8 正志：いや、もう全然わかんないよ、これもう
- 9            もらっていいのかなあっておもって
- 10          ラッキーみたいな

上記の例の少しあとに交わされた次の会話では、靴の箱に入っていたものが足袋であることについて、「なんでわかったのか」「どこでわかったのか」何度も夫に聞いている。

#### 例12

- 1 弘子：(笑いながら) くま君わかったあ？

- 2 正志：何が？
- 3 弘子：これー。あたしー瞬見て、これなん
- 4 布って言うか
- 5 正志：いや、最初すぐわかったよ、おれ
- 6 弘子：なんでわかったの、これ
- 7 あたし全然、もうなんだろうと思ってさ
- 8 布——
- 9 正志：いや、これもう知ってるから、うん
- 10 弘子：なんで知ってるの？
- 11 正志：だってさ、土方の人とかがさ、はいてんじゃん
- 12 弘子：(笑い)
- 13 だってさ、こういう布だからさ
- 14 ラルフ・ローレンのなんか紺色の、あれ、  
何かーポーチみたいのかなーって
- 15 思っちゃった、最初
- 16 正志：え、ほら
- 17 弘子：どこでわかった？ くま君
- 18 正志：いや、もう、色、色といい、形といい
- 19 すぐ、うん
- 20 弘子：でも説明されるまでわかんないじゃん、地下足袋
- 21 正志：ううん、わかったよ、
- 22 弘子：違う、違う、なんで地下足袋入ってんのか、
- 23 最初ギャグだと思った？
- 24 正志：もう完全にギャグだと思った

妻は「なんでわかったの」「なんで知ってるの」「どこでわかった？」と繰り返し問うている。時折台所に立つ弘子にとっては、彼女の位置から見える青い布は、足袋とはわからなかった。また、子どもの時から本物の地下足袋を間近でみたことがない。そばで見ても、やはり足袋であることがよくわからなかったのである。

一方、このいたずらを仕掛けられた時、足袋にすぐ反応した夫にとっては、

妻がなぜこのような質問をするのかわからず、当惑する（例11の5行目「え？」「うっ」）。また、「何が？」（例13）と言って質問の真意を問うといった行動をとっている。そののち、「すぐわかった」といって、足袋が入っていることをすぐ理解したことを伝えている。夫婦を「わかった人」「わからなかった人」にこの場面もまた明らかに分けている。すぐに足袋のいたずらが「わかった」夫と、「なぜすぐに夫はわかったのか、わからない」妻。共有している出来事について語っているはずであるにもかかわらず、「質問する人」と「答える人」という会話上の役割が分かれただけでなく、「情報を持っている人」「持たない人」といった相互関係上の立場の違いも生み出している。

## 7. なぜおかしいのか

足袋のテーマで夫婦は思い出し笑いを続ける。しかし、二人はなぜこの出来事が笑う価値があるのか、話の落ちは何か、一致した理解には達していないことが、会話の中で明らかになる。

まず、出来事①に関しては、ゴム底付き足袋は土木作業に携わる一部の人が使うものと一般的には考えられ、それ以外の日本人は現代では、はくことがほとんどない。しかし、アメリカ人はそのような事情をしらず、あくまでも善意として取った行動である点が、おかしいと夫は解釈した。しかも日本的な足袋が西洋のブランドであるラルフ・ローレンの箱に入れられたこと、値段的にも足袋は安いブランドの靴は高いというギャップがあること、こういった点が、この出来事の面白さであり、繰り返し語る価値を与えている。

しかし、弘子は、なぜこの出来事はおかしいのか、というレベルでもやはり「わからない」、「わからなかった」を繰り返したのち、夫と異なる見解を述べる。

### 例13

1 弘子：あたし最初箱あけたときさあ

2 何が、

3 何がはいってっか、わかん、みてもわかんなかった全然

4 [間一秒]

- 5 弘子：なんでラルフ・ローレンの箱にいれたんだろうねえ、その人  
6 正志：(笑いながら) それがアメリカ人だから箱がなかったんじゃないの？  
7 靴を入れる、  
8 あれ靴だからさあ、根本的には  
9 だから (笑う)  
10 靴だから、おんなじ靴だからいいだろうって  
11 弘子：(笑う)  
12 それってびっくりカメラ (笑う)  
13 正志： (笑う)  
14 弘子：それってびっくりカメラののりだよ、あれって  
15 大まじめにやれるからおかしいんだよ、絶対  
16 (0.5秒の間)  
17 正志：アメリカ人の人にとっては大まじめなんだよ

弘子は、ギャグなのに大まじめにやれるところがおかしいと述べる。なぜ足袋を靴の箱にいれたのか、弘子は納得していない(5行目)。14行目で「まるでびっくりカメラののりだ」と指摘しているが、あらかじめ相手をびっくりさせるためにわざと仕掛けたいはずらが、びっくりカメラなのである。それに対して、夫は、もともと大まじめにやっていることで、わざと演じているわけではなかったと指摘し(17行目、「アメリカ人の人にとっては大まじめなんだよ」)、大まじめにやっているからこそおかしいのだ、という解釈を示す。このような互いの解釈の違いは、16行目のわずかな間にも反映されていると思われる。ただし、全体としては笑いが多く、二人の解釈の差はあまり大きくクローズアップされているわけではない。

次の会話は、先にあげた例4の一部であるが、箱にはいていたものが足袋であると認識できなかったために、何がおかしいのかわからなかったと妻がいう場面である。

#### 例4より一部抜粋

- 1 弘子：だって、へへへへ〜くらいだよ、正志君  
2 あーんなに甲高い声上げてあんなに

- 3 あたし何おこったのかわかんない  
4 何をさー三人で笑ってんだかさ  
5 何でおかしいのかなーって

このように、何がなぜ起きたのか、理解していなかった妻は、結局なぜ自分以外の3人が笑っていたのか、なぜおかしいのか、についても、わからなかったことを夫に伝えることとなった。

ここまで見て来たように、妻の「わかんない」というセリフは会話中いたるところで聞かれた。足袋のいたずらを仕掛けられたとき、妻もその場におり、またこの録音会話中思い出し笑いを夫と妻二人ともずっとしていたにも関わらず、「わかんない」という発話を一つ一つ分析していくことで、ナラティブ理解に必要な複雑な要素が浮かび上がってきたといえよう。

では、最後に、次のセクションでは、「わかんない」と何度も言われた夫の反応の仕方に注目していきたい。

## 8. 夫の反応の仕方

「わかんない」と妻が言う時、そのあとには沈黙や、言い淀み、真意を問う質問などが続く。「わからなかった」を連発する相手に対する夫の対応の仕方は大きく分けて次のようになる。

- ① 沈黙する
- ② 適当にあいづちをうつ
- ③ 言い淀む 「え?」「うっ」
- ④ 笑う
- ⑤ 何がわからないのか、確かめる質問をする 「何が? 最初?」
- ⑥ 訂正する 「違う、違う」
- ⑦ 説明をする

例えば、次の会話は例11の抜粋であるが、妻の質問の後、2秒間の間があり、そして夫はいいよども、質問の真意を確かめる。

【例11より一部抜粋】

- 3 弘子：でもくま君わかった？
- 4 [間2秒]
- 5 正志：う？ 何が？
- 6 最初？
- 7 弘子：うん
- 8 正志：いや、もう全然わかんないよ、

この会話では、夫は困惑して質問への回答は遅れてしまう。箱を開けた最初の時にいたずらであるとすぐわかったかどうか、を聞かれているのか、確認がとれてから、8行目で「もう全然わかんないよ」と答えることができた。

また、次にあげた会話（例10の会話の一部）では、夫が「うん」と言っているが、妻がなぜそのような質問をするのか、理解できず、質問の意味を考えながら、とりあえずあいづちを打ち、沈黙が最後には生じた例である。

【例10より一部抜粋】

- 1 弘子：それで、どうしたの？
- 2 正志：・・・うん
- 3 弘子：じゃどうしたの？ それで。笑うわけにいかないじゃん、
- 4 正志：うん
- 5 弘子：どうしたの？ それで
- 6 [間2秒]

このように、上記①～⑦を組み合わせた反応の仕方であるが、言い淀み、相手の質問の真意を確かめる質問、沈黙といった反応は、夫の困惑を反映して、何とか会話を修復 (repair) しようとしているために起こったと言えよう。プレイバック・インタビューでも、夫は、妻の言っていることが分からず、「多分こういうことをいいたいのだろう」と解釈して話を進めざるを得ない時があった、と述べている。答えを考えている間におきる沈黙や、とりあえずのあいづち、間違った解釈は、しかし、妻の理解を助けることにはならず、妻は繰り返し自分の疑問を述べることとなった。



## 9. 「わからない」ことの言語化と identity

共通に体験したはずの事柄であっても、弘子は「わからなかった」を繰り返した。会話参加者間の持つ情報量の違い、特に交友関係の違いからくる山村に関する情報の差、社会的・一般的知識（例：地下足袋の色と形。山村の会社はゴムと関係が深い等の知識）、会話者の視点からは見えなかったり聞こえなかったりした断片の情報（例：弘子が台所にいっている間に交わされた会話）など、さまざまな情報が実は存在する。その一つ一つが、物語の理解に影響を及ぼすのである。

「何が」起きたのか、解釈は複数の可能性にさらされるが、「なぜ」起きたのかも複数の解釈が可能である。

Georgakopoulou (2007: 89) は、discourse identity と social identity の区別について、discourse identity が questioner-answerer, speaker, (over-)hearer など、インタラクション上の役割を示すのに対して、social identity は性別、年齢、地位などに基づき形成される、より大きな identity である、と指摘している。会話参加者は、この両方の identity を持つことにより、会話における役割や、発言の意味解釈を変化させていくこととなる。

本研究においても、夫と妻という社会的役割、年齢の差、社会的知識の差からくる異なった social identity を持つ会話者が、「出来事が分からなかったために説明を必要としている人」（または質問する人）と「出来事を理解し、説明をすることができる人」（または答える人）に分かれる結果となった。

足袋のいたずらを仕掛けられた時、夫も妻もその場において、共にいたずらにあった。その意味では、同じ思いを共有している者という位置づけが可能である。実際、この会話では笑いが多く、二人は思い出し笑いを何度もしている。しかし、妻が「くま君わかったあ?」「どこでわかった?」「なぜわかったの?」と、何度も聞く時、そこには、もう一つの identity、つまり、「わかる人」「わからない人」が出来上がるのである。

## 10. 結論

ある一組の夫婦の自然会話において発生したナラティブをとりあげ、物語が

「わからない」ことの原因の多層性をみてきた。我々の日常生活の中で、共通の体験に基づくと考えられている物語でも、実は①誰の視点から語っているか、②会話参加者の持っている個別の情報の違い、③話の落ちに対する思い込みの違いなどによっては、全く異なった物語として理解される。共有しているはずの物語でも、会話参加者の視点が異なれば、共有していなかったことが明らかになる場合があることを示した。共通に体験し、共有している出来事のはずなのに、なぜわからないのか、会話参加者間の困惑につながることもある。

また、「わかんない」「わからなかった」が繰り返された時、会話参加者が共同で物語の解釈を作り上げていく過程が、結果的に「わかる人／わからない人」、「答える人／質問する人」に参加者を二分することとなる。

“...what is tellable and why, depends on culturally recognized experiences and values.”と Thornborrow & Coates (2005: 12) は述べているが、この文化的な経験や価値観の差は ethnic background の違う者だけではない。Tannen (1984) がアメリカのサブ・カルチャーにおける会話スタイルの違いに注目し、いわば異なる個人間の出会いは異文化コミュニケーションとしていつでも捉えうることを指摘した通り、本研究でとりあげた日本人夫婦の会話においても、出来事の解釈をめぐって一種の異文化コミュニケーションが起きていたとも言えよう。同じ出来事をどの視点から捉えているか、またそれぞれのもつ社会的知識の差などが、物語の解釈や、「語る価値がある」こととはなにか、なぜそれが語る価値があるのか、つまり “tellable” に関わる解釈にも影響を及ぼすのである。

## 参考文献

- Duranti, Alessandro. 1986. The Audience as Co-Author: An Introduction. *Text.*, 6, 3, 239-247.
- Georgakopoulou, Alexandra. 2007. *Small Stories, Interaction and Identities*. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins Publishing Company.
- Labov, William. & Joshua, Waletzky. 1967. Narrative Analysis: Oral Versions of Experience. In J. Helm ed., *Essays on the Verbal and Visual Arts: Proceedings of the 1966 Annual Spring Meeting of the American Ethnological Society*. Seattle: University of Washington Press, pp. 186-338.
- Labov, William. 1972. *Language in the Inner City*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Ochs, Elinor, Ruth C. Smith & Carolyn E. Taylor. 1989. Detective Stories at Dinnertime: Problem-Solving through Co-narration. *Cultural Dynamics*, 2, 238-257.
- Ochs, Elinor & Lisa Capps. 2001. *Living Narrative*. Harvard University Press.
- Okazaki, Shoko. 1994. *Ellipsis in Japanese Conversational Discourse*. Georgetown University, Ph.D. dissertation.

Polanyi, Livia. 1979. So What's the Point? *Semiotica*, 25, 207-241.

Tannen, Deborah. 1984. *Conversational Styles* NJ: Ablex

Thornborrow, Joanna & Jennifer Coates ed. 2005. *The Sociolinguistics of Narrative* Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins

Yohena, Shoko Okazaki. 2003. Conversational Styles and Ellipsis in Japanese Couples' Conversations. In Thiesmeyer, Lynn ed. *Discourse and Silencing*, Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. 79-110.

饒平名尚子 2005. 言わなかったことは フェリス女学院大学

## 註

- 1 省略をめぐる夫婦の会話のスタイルの違いと誤解についてはYohena 2003および饒平名(2005)にも詳しく述べた。